

---

# 自殺

真貴人

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自殺

### 【Nコード】

N0252D

### 【作者名】

真貴人

### 【あらすじ】

「今日も独り、明日も独り・・・」彼は考え込んでいた・・・。  
「一生独りなのかな、俺は・・・。」一人「じゃなくて『独り・・・』」昔の友達の顔が、瞼の裏に現れる。もっとも、今は『友達』と呼べる間柄の人は、存在しないが・・・。そう、彼は死のうとしていた。

## 第一章（前書き）

「今日も独り、明日も独り・・・」

彼は考え込んでいた・・・。

「一生独りなのかな、俺は・・・。

『一人』じゃなくて『独り』・・・』」

昔の友達の間顔が、瞼の裏に現れる。

もつとも、今は『友達』と呼べる間柄の人は存在しないが・・・。

そう、彼は死のうとしていた。

何となく続けている仕事。目標の無い毎日。

4人兄弟の中で、二人の兄も弟も優秀だが、自分だけが高校中退で親・親戚からの風辺りが強く落ちこぼれと言う現実。

そして、最愛の人との別れ・・・。

何もかもが如何でも良くなった。

「生きてても、良い事はない・・・」

「最後にバーチャンの手料理が食べたかった・・・」

## 第一章

（5日前）

「・・・・・・・・」

彼の名前を呼び続けている。

「がんばれ！ バーチャンがんばれー！」

「バーチャンね、もう、駄目みたい・・・」

「バーチャンのぶんも…たくまし…く……」

ピー・・・・・・・・

「バーチャアアアアん・・・・・・・・！！！！！！」

「死んだか。やっと邪魔者がいなくなって助かったな」

「それより遺産の相談だが・・・」

「ああ、そうだな。」

家族と親戚は誰一人悲しんでないようだ・・・。  
葬式などは事務的に行われた。

表面的には悲しいフリ等をしてはいるが

本心で悲しんでるのは彼だけだった・・・。

「ふざけんなよ・・・」

彼は怒っている。

「（なんで、誰も・・・誰も、悲しまないんだよ・・・。）」

二人の兄に、弟からも軽蔑されていた彼。

高校中退してからは家には居場所が無く、親からはゴミ扱い。

だがそんな彼にもバーチャンだけは優しかったのだ・・・。  
そのバーチャンも、もういない・・・。

「す、すいません。遅刻しました」

「おやおや。良い気なものだね。」

彼はうどん屋に勤務している。

「す、すいません・・・。」

「いやいや、良いんだよ。やる気が無いなら辞めてくれて良いんだよ?。」

彼は対した仕事が出来ず、この嫌味な店長の捌け口で有った・・・。

「・・・」

誰からも、必要とされない・・・。

## 第二章

そして、更に彼を、悲しい現実が襲うのだった・・・。

――――

Re：

なんで・・・？なんでなの・・・？

Re：みさと

ごめんなさい・・・

もう、貴方とは、続けられません・・・。

友達でいたかつたんです・・・。

Re：

なんで、俺は君がいたから頑張れたのに・・・  
君がいなきゃ駄目なのに・・・。

捨てないで・・・お願い 捨てないで・・・

――――

誰からも 愛されない・・・。

好きだったバーチャンの死・・・。

愛する人との絶縁・・・。

彼は、何もかもがどうでも良くなった。

そして、自殺を決意した・・・。

「バーチャン、ごめん・・・。言い付け、守れそうにもないよ・・・。

」

彼は準備をしている。

自殺の方法は既に決めていた。

『電車飛び込み』

家族に大量の請求書が来る恐れがあるので却下。

『飛び降り自殺』

下にいる人にでも当たったら大変だ。

そこで彼が考えついたのは、樹海に向かってその中で、薬物自殺だ。

タイトルは忘れたが、彼は昔、樹海で男女が自殺するドラマを思い出した。

樹海での死を選んだ人達の『美しい死に方』とイメージと現実の間には、  
少なからぬギャップがある。



彼らは自らの死後の無惨な姿を客観的に想像し行為に及ぶのだろうか。

樹海の中で死ねば、肉体は鳥獣に食い散らかされ腐乱していく。

この様な事は少し想像すれば誰でも分かる事だ。

無論、彼にも例外なく分かっていた・・・。

だが、それで良いのだ。腐乱死体になって自分等消えてしまえば良い

彼はそう思っていたのだ・・・。

青木ヶ原の樹海で死ぬ事を既に決めていた彼。

「樹海で眠ったら……バーチャンに会えるかな……」

「生まれ変われば、アイツを越せるかな。俺を、愛してくれるかな・  
・。」

### 第三章

「一応ネットの友達にも別れを告げとくか……。」

そー言つて、自分が常駐している大型掲示板の馴れ合い板のスレッドに、

『今から死にに行く。お前ら世話になった』

と言つた書き込みを残す彼。

リアルタイムで様々なレスポンスが返つて来る。

『早く死んでね』『勝手に死ぬ』と言つた定番の煽りのレス。

『何言つてるんだ?』『冗談言つなよ……。』と言つた彼の身を案じる心配のレス。

が、今の彼には、心配のレスすらも全てが事務的な偽善めいた事に見えるのだつた……。

皮肉にも、実際その推測は当たっているのだが……。

「何、心配したフリしてやがんだコイツ等……。」

「ネットで出会つた奴を本気で心配なんてする分けネーだろ……。」

その時、気になっていた女性HNのレスが目止まる……  
例の、メールを絶縁された子だ。

『お願い 死なないで。帰って来て・・・』

「・・・・・・・・」

だが、それも表面的な言葉だった・・・。

実際には、そのレスには意図が有った。

この馴れ合いサイトでのスレッド上にて、  
優しい言葉を掛けて自分のHNとしての周りからの評価を上げる為  
で有る。

実際彼の常駐している掲示板でHNを付けてる者が美しい言葉を列  
挙する時は、  
大抵がそういう意図で有り、 本心から心配する書き込みは希少、  
いや、皆無と言っても過言では無いだろう・・・。

彼は、この女性HNと仲が良かった。  
スレッドでのやり取りや、メールをしてる内に想いを寄せていたの  
だ。

日に日に彼女への想いが強くなっていった彼。  
だが、彼女は彼の気持ちに応える事は出来なかった・・・。  
あくまでも『友達でいたい』と告げられたのだ。

彼は極度の対人恐怖症からか、電話が苦手だった。  
彼女と電話をしたら怖くて切ってしまうのだ。

そこで自問自答をしていた。

『なんで好きなのに電話が出来ないんだ・・・』

『俺じゃ彼女を幸せに出来ない。守れない・・・』

自分の無力さを痛感したのも自殺を決意した一つの要因だった。

それほどまでに、彼女への想いは本物だったのだ・・・。

ネットで出会った、文字だけの繋がり of 彼女を・・・。

彼女との出会いは、彼が以前にふとした事で自殺を決意し、

馴れ合い掲示板に『今から死にます』と言うスレッドを立てた事だった。

その時、野次や煽りも無論有ったが、懸命に止めてくれた板住人達・・・。

彼女もその中の一人だった。

住人達の説得により自殺を辞めた彼。

そして、次第にその人に想いを寄せて行くのだった・・・。

叶わぬ恋だとは知らずに・・・。

彼は、彼女とメールやチャット等で交流を取るようになった・・・。

だが、段々気付いて来たのだ・・・。

彼女が彼への同情や哀れみでメール等をしてくれていた事・・・。  
彼女の想いが自分には向いていない事を・・・。

彼は、敏感に察知してしまったのだ・・・。

彼女は別の男HNの事が好きな事を知ってしまった彼・・・。

自分の事は友達としてしか、見てくれてない事も・・・。

そして、その男HNとリアルで会った事も、互いに住所を知っている事も・・・。

そして、それらを隠されてる事も・・・。

それらの事実は彼には、余りにも大きかったのだ・・・。

「みさと（女性hnの名前）・・・  
愛してたよ・・・。結婚したかった・・・。守りたかった。」

「君は、幸せになってね・・・。」

泣きながらタイピングをする彼。

「『君の為に帰って来るよ』・・・と」

彼は、心配させぬ為なのか騒ぎを大きくさせぬ為なのか知れないが、  
そう書き残して、家を後にするので有った・・・。

もう、帰らぬつもりで・・・。

彼が今日を自殺日に決めたのも、  
単なる偶然の様に見えるが、実は必然なのである。

と言うのは、今日が11月12日、月曜日だからである。

自殺者が多い曜日は月曜日である。これはブルーマンデーの影響があると思われる。

逆に少ない曜日は土曜日で、男女ともに同じ傾向である。

彼も、無意識の内に『月曜病』の影響を受けて実行を決意したので  
有ろう・・・。

#### 第四章（前書き）

彼が今日を自殺日に決めたのも、  
単なる偶然の様に見えるが、実は必然なのである。

と言うのは、今日が11月12日、月曜日だからである。

自殺者が多い曜日は月曜日である。

これはブルーマンデーの影響があると見られる。

逆に少ない曜日は土曜日で、  
男女ともに同じ傾向である。

彼も、無意識の内に『月曜日』の影響を受け、  
実行を決意したので有ろう・・・。

## 第四章

切符を買い、電車の到着を待つ彼。

彼は、ふと思った・・・。

「電車に飛び込んで死ねば、アイツ等を苦しませてやれるかも・・・」

飛び込み自殺をすれば、  
その後の処理や請求等で、自分を疎外していた両親に復讐出来ると  
考えた彼。

だが、その時。

「・・・ちゃん」

彼の脳裏に、聞き覚えのある懐かしい声がした。

「え・・・？今の・・・。なんだ・・・？」

気づけば電車が到着していた。

声の事は忘れ、電車に乗り込む彼。



彼は、家族連れと同席になった。

「ぶーーーーーん」

子供が無邪気に暴れている

「こら！静かにしてろ」

「ど、どもすいませんね。」

父親が子供を叱り、母親が謝って来た。

「あ、い、いえ・・・」

「・・・（家族・・・か）」

ふと、『何かが』が脳裏を過ぎる。

「母ちゃん、見てみて！！良い景色だよ。」

「本当ね。」

「こらこら、電車の中で暴れるんじゃない。」

だつて父ちゃん、本当に良い景色なんだよ!」

「ああ、そうだな。」

これは・・・なんだ・・・

「だからさ、頼むよ。1千円でいいんだよ?」

「な、頼むよ。煙草買う金も無くてモ」

「い・嫌だ・・・。」

「テメー。殺されたいのか。」

その時・・・。

「やめろ、お前ら!!」

長男が助けに来た。

「やばい。逃げるぞ。」

猛スピードで去って行く虐めっ子達。

「に、兄ちゃん、ありがとう・・・。」

「ああ、虐められたら俺に言えよ。守ってやるからな。」

やめろ・・・。

今のは、なんだ・・・。

思い出・・・？いや、違う・・・。

家族で何処に行く時だって、俺はいつも置いてけぼりだったじゃないか・・・

今のは、夢？幻？なんなんだ・・・。

「・・・ちゃん・・・」

子供が、声を掛けてくる。

「え？」

「お兄ちゃん、気分悪いの？これあげるから元気出して？」

そー言つて彼に飴を差し出す子供。

「あ・ありがとう・・・いいんですね？」

「貰つてあげてくださいな。何かすいませんね。」

「あ、いえ・・・はい。」

「所で、失礼ですが、一人旅か何かですか？」

「ええ・・・まあ、自分を見つめ直す旅って言つか・・・。」

彼は言葉に詰まった。それもその筈だ。

『自殺しに行く』等と言える筈無いのだから・・・。

「そーですか。若いとは財産ですね。何でも出来る。」

「・・・」

「（何でも・・・出来る・・・）」

でも・・・もう遅いんだよ・・・

23年間生きて来て 何も良い事なんて無かったからな  
家族からは見向きもされない……。

職場では、いてもいなくても大して困らない存在……。

そして、好きな人も幸せに出来ないクス野郎……。

俺なんて、死んだ方が良いんだよ……。俺なんて……。

誰からも愛されない。誰かを愛する資格も無い。

「ほら、お兄ちゃんにバイバイしなさい。」

家族連れは先に降りるようだ。

「お兄ちゃん！！バイバイ！！」

「う・うん……。」「

「あ、あの……。」「

「？」「

「飴……。ありがとうね。」「

「うん！」「

・・・電車は、目的地に付こうとしていた・・・。

## 第五章

近辺の歩道橋には、

『命は親から頂いた大切なもの もう一度静かに両親や兄弟や子供のことを

考えて見ましょう 独りで悩まず相談して下さい』

（実際に現地にはこう言った看板が実在する。）

と言った、自殺志願者に呼びかける偽善めいた看板を頻繁に見かける。

「さてと……。旅館は向こうか……。」

「（最後の晚餐……か）」

彼は、最後の一夜を、

昔バーちゃんと泊まりに訪れた旅館で過ごそうと決意していたのだ。

その時、1人の老人の姿が目止まる。

「ぜえ……。ぜえ……。」

重そうな荷物を持って苦しそうだ。

「あ、だ・大丈夫ですか。家はお近くですか・・・？良かったら持つて行きます。」

見兼ねて駆け寄る彼。

「・・・？」

「あ、どうもすみませんね。お願いしていいですか。」

「あ、は・・・はい。」

「（この人、目が不自由なんだ・・・）」

彼は、老人宅まで荷物を運んで来た。

「助かりました。まあお礼に上がってお茶でも。」

「あ、いえ・・・急いでますので・・・」

「まあまあそう言わず・・・」

「え、あ・・・はい・・・」

断りきれない性格の彼・・・。



家にかかる彼。

「一人暮らしで、らっしゃるんですか・・・？」

「ええ・・・馬鹿息子がいたんですけど・・・」

急に重い表情になり口を開く老人。

「去年の春に、自ら命を絶ってしまいましたわ・・・。」

「！！」

驚きを隠せない彼。それもその筈だ。

自分もその息子と、同じ運命を辿ろうとしているのだから・・・。

「そ・そーなんですか・・・」

彼は至って冷静に気にしてない様に振舞う。

「あ、あの・・・」

「？」

「こんな事聞いちゃいけないと思いますけど・・・」

彼は少し躊躇しながら切り出す。

「息子さんが亡くなられた時、勿論悲しかったですよね？」

「ええ、もちろんです。」

彼は、何故こんな当たり前の事を聞いているのか自分でも分からなかった。

「自殺する者は、残った者の事などお構いなしですよ。」

老人は淡々と淋しげに語る・・・。

「残った者の悲しみなど考えずに・・・。身勝手に死ぬのですよ。」

「じゃ、じゃあ・・・あの」

声が少し震えている彼。だが、質問をやめようとはしない・・・。

「はい」

老人は静かな口調で聞き返す。

「死んでも、悲しむ人がいない人は・・・」

「悲しむ人がいない人は・・・自殺しても問題ないって事ですよね？」

「ふむ・・・。それは私には分かりかねませんが・・・」

「・・・」

「少なくとも、貴方が死ねば私は悲しみますよ。」

「!!」

「それでは駄目でしょうか？」

老人が強い口調で問い返してきた。

「え・・・!？」

彼は戸惑いを隠せない。

老人は、全てを見通してる感じで有った。

まるで、彼がこれから樹海に向かい、命を絶つ事を理解してるかの様に彼には思えた・・・。

夕飯にも誘われたが、丁重に断り、  
彼は戸惑いながら、老人宅を後にする。

## 第六章

旅館に着き、手続きを終え、部屋に入る彼。

「懐かしいな・・・」

「・・・」

彼はふと、彼女の事が気になって、例の馴れ合い掲示板へ携帯から  
繋いで閲覧してみる。

すると・・・。こんな書き込みが・・・

5 9 2   ：みさと   ：2 0 0 7 / 1 1 / 1 2 (月)   2 1 : 3 3 :  
4 9   ID : ? ? ? ?

私は信じてる・・・。まきちゃん(彼のHN)は私の為に帰って来  
るって言ったもん。

自惚れでも良い。私は信じて待つてる・・・。

愛するみさからの書き込みだ……。

『文面から』は彼を心配してるのが窺える。

真意は、別だとしても……。

「……」

「ごめんね……。ごめんね……。」

彼は涙を流している。

「でも、もう良いんだ……。俺は終わりにする……。」

「俺が死んで、悲しむ人なんていないんだ……。」

「みさとは、幸せになってね……。」

彼の精神状態はもはや普通では無かったのだ。

誰が止めようが、もはや聞く耳持たないと言った感じだ。

決意は硬かった。

電車での家族連れの事も、あの老人の言葉も既に忘れているのだろうか。

そして、愛する人からの言葉も届かないのだろうか……。  
とは言っても、偽りの言葉だが……。

「降りて……。飯を食うか。」

彼は食事の為、下へと降りていく。

『最後の晚餐』を終え、風呂に入り眠りに付く彼。

その夜、彼は夢を見た……

「みんなー。準備出来たわね。」

「わーい。焼肉は久しぶりだー。」

「ねえ、アイツは……？」

「アイツはほつとけ。バーチャン家で遊ぶ方が楽しいんだろ。  
それに、あんなクズはいない方が楽しいだろ？」

「それもそうだね。」

「あんな奴の話はいいから早く行くわよ。」

「落ちこぼれが・・・」

彼は小学校から不登校を続けており、フリースクールに通っていた。

その事を良く思わない両親や親戚からは疎外されていた。

だが、バーチャンだけは違った…。

『自分らしく生きて欲しい』と

学校に行く事を強要したりしなかったのだ・・・。

「バーチャン!!」

「あら、・・・今日はみんなで遊びに行っただんじゃなかったの？」

「俺、バーチャンという方が楽しいからいいんだ。」

「あらあら・・・。」

こうやって遊びに来てくれるのは四人兄弟の中で、彼だけだ。

バーチャンにはそれがたまらなく嬉しかった。

元旦にはバーチャンの家に親戚中が集まる。

その時も彼は肩身が狭かった。

学校に行っていない落ちこぼれと言う事で、親戚からの風当たりが



強かったのだ。

「ほら、お年玉だぞ三人とも。」

「はい。有難うございます。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうオジちゃん」

お年玉も、彼だけは貰えなかった。

「・・・」

「いらつしゃい。」

そう言つて彼にお年玉を渡すバーチャン

「バーチャン・・・ありがとう。」

「いいのよ、アナタはアナタだから。バーチャンはアナタの味方よ・  
・・」

「バーチャン・・・」

「それより。お前、ふりーすくーるとか言つ分けの分からん施設に通つてるそつだな？」

「なんで学校に通わん？あ？」

親戚で集まると決まってこのような質問をされる彼。

「あ、いえ・・・その・・・」

「ハッキリ言わんか？何故学校にいかん？」

『あんな洗脳組織に行きたくない』  
『フリースクールの方が楽しい』

そう言い返したかった彼。だが、言う事が出来なかった・・・。

何よりも、フリースクールが馬鹿にされた事が悔しかったが、  
彼はただ泣く事しか出来なかった・・・。

「泣けば済むと思ってるのか！」

彼に手をあげる伯父。

家族も従兄弟もニヤニヤしながら横目に見てるだけだ。

その時・・・

バーチャンが彼を、身を挺して庇った

「バーチャン！！」

「母さん。退いてくれ。その軟弱者を鍛え直すんだ。」

「止めて下さい・・・彼は優しい子です。」

そう言つて伯父を睨み付ける祖母。

「う・・・」

「彼を傷付ける人は許しません・・・。彼は私の可愛い孫です。」

止むを得ず椅子に座る伯父。

「バーチャン・・・？大丈夫・・・？」

「大丈夫よ。言つたでしょ？バーチャンはアナタの味方だつて。」

「バーチャン・・・ありが・・・ど・・・」

涙で上手く言えない彼。

「ほらほら、男の子でしょ。泣かない泣かない。」

家族からも親戚からも疎外されていた彼。

だが、バーチャンだけは違った。

彼は、そんなバーチャンが大好きだった。

そんな大好きだったバーチャンが亡くなったのは5日前だ……。死ぬ前に1度だけ目を覚まし思い出したように、

「ごめんね バーチャンのぶんも…たくまし…く……」

と言った。

彼は一言「ありがとう」と言おうとしたが、最後までその一言は声にならなかった……。

## 第七章

The diagram shows three vertical columns of dots, each containing 12 dots. These dots represent the three strands of a braid, with the leftmost column being the leftmost strand, the middle column being the middle strand, and the rightmost column being the rightmost strand.

彼は魘されている・・・。

激しい呼吸をしながら目覚める。

「夢か……」

「バーちゃん……。」

バーチャンの事を思い出し、悲しくなる。

だが、不思議と涙は出ない……。

「ごめんね．．．俺も、もうすぐそっちに行くからね。会えるからね．．．」

ふと時計を見ると、時刻はまだ1時だった。

「まだちょっと早いな……。もう一眠りするか……。」

彼は、再び夢を見た……。  
愛するみさとの夢だ……。

彼女が自分の事を心配している夢を……。

……翌朝……

「やっぱ、夢か……。」

「俺の事なんて、心配する分けないしな……。」

「バーチャン、俺も、もうすぐそちに行くからね……。みさと。  
幸せになってね……。」

手続きを終え、この旅の最終目的地の樹海へと向かう彼であった。

「ジュース、買っていくか・・・。」

彼は樹海の近くのバス停付近でジュースを買った。

樹海のすぐ傍にはバス停があるのだが、  
その周辺でジュースを買って樹海の中に入っていくというのが自殺者に多いパターンだ。

これは樹海の中で睡眠薬で服毒自殺をする人が多いからだそうである。

彼もまた、例外では無かった・・・。

## 第八章

「こつちか・・・。」

樹海の中に入るには、自然公園内の遊歩道を外れればよい・・・。

至って簡単である。自殺の名所として、こんなに簡単に入れるのは問題かもしれない。

しかし、遊歩道の至る所に、自殺者に呼びかける看板が存在する。

『ちよつと待てゝ君の人生は楽しいか、それとも苦しいか。

世の中は苦しい事ばかりではない。楽しい事も多いはずだ。

人生を楽しく過ごす為にもう一度よく考えよう。必ず何かがあるはずだ。

たった一つの命を大切にしましょう。困ったら下記へ相談を。

田村役場自殺防止連絡会 00-00000  
』

等と…。

しかし、自殺をする者達にはこの立て看板が見えないのか、

はたまた見えていても、確固たる意志をもって入って行くのだろうか・・・。

道沿いには廃車がいくつかある。



この車は不法投棄されたのだろうか・・・

それとも、持ち主が樹海に入ったきり帰って来ないのか・・・。

真実は闇の中だ・・・。

彼は、廃車を横目に樹海へと向かう・・・。

樹海内に突入する彼。

まわりは完全に闇だ・・・。

しかも、異様な臭さがする。

これが『死臭』というものだろうか。

遊歩道がどれだかよく分からない。

明かりなしで置いてきばりにされたら、普通の人間なら発狂しそうな状況で有る。

「・・・」

そんな事は気にもせず進み続ける彼。

## 最終章

「ついた……。」

入り口前には、女性が立っていた。

「……」

女性は、軽く一礼して来た。

「……。」

彼も、軽くペコリと頭を下げる。

女性は中へと向かって行く……。

「（あの人も、死ぬのか……）」

「あれ、あの人……何処かで……。」

その時、彼の脳裏に愛する人が過ぎる……。

愛しの人とメールをしていた楽しい思い出が……

朝から番までメールをしていた時の事を……。

仕事中にも合間を取ってメールをしていた。

電話が苦手な事を分かっていたくれたので、優しく

「焦らないで、少しずつ克服して行けば良いじゃない・・・」

と言ってくれた事を・・・。

「違う・・・。みさとは俺の事なんて嫌いなんだ・・・。」

なんで・・・俺は君の事を好きなのに分かってくれないの・・・  
俺は君がいなきゃ駄目なのに・・・君がいるから生きて来れたのに・  
・・

「ずっと友達でいましょう・・・」

その一言で俺がどれだけ傷付いた事か・・・。

分かってた・・・。分かってたんだよ・・・。

俺とメールしてたのは、同情や哀れみからだって・・・。

君の気持ちは俺じゃなくて、アイツに向いていた事も・・・。

俺が誕生日プレゼントを贈ってあげたいと言った。

でも、君は断った・・・。友達だから貰えないと・・・。

アイツには住所も教えたのに、俺には教えてくれないんだね・・・。

。 バレンタインにチョコを送る程の関係だと言う事も知っている・・・

去年のクリスマスにアイツと会った事も知っている・・・。

そして、それらを全て俺に隠している事も・・・。

「でも、良いんだ・・・。 もう、良いんだ・・・。」

彼は呟いている。

「みさとは幸せになってね・・・。

23年間生きて来て、こんなに人を愛したのは初めてだったよ・・・。」

彼は愛に飢えていた。

時にはネットで出会って想いを寄せた彼女に、愛情を強要する事も有った。

他の男とはメールしないように告げ、束縛した事も有った・・・。

それを彼女が嫌がっている事も分かっていた・・・。

それが悪い事だとは自覚していたが、

それ程までに歪んだ愛だったのだ・・・。

歪んだ強き愛。 なんと皮肉なのだろうか・・・。

「もう、行こう……。」

だが、彼を止めるかのように、更に色んな人が脳裏を過ぎる……。

「バーチャンのぶんも……たくまし……く……。」

大好きだった、バーチャンの事が……。

「そうですね。若いとは財産ですね。何でも出来る。」

「お兄ちゃん、顔色悪いの？これあげるから元気出して？」

電車の中で出会った家族連れの事が……。

「残った者の悲しみなど……身勝手に死ぬのですよ。」

偶然出会ったあの老人の事が……。

そして……

「……。」

「さっきの……女の人……？」

「・・・」

「君は、どうして死ぬの・・・？」

「そして・・・俺は、なんで死ぬの？」

「なんで、死ななきゃ・・・いけないの・・・？」

彼は泣いている。何故泣いているのかは自分でも分からない・・・。

「バーチャンはなんで死んだの・・・？」

「オジイさんの息子さんはなんで死んだの・・・？」

「君はなんで死ぬの・・・？」

「俺は、なんで死ぬの・・・？」

「俺は・・・俺は・・・」

「俺は・・・」

この日 彼は 自殺した

そう 彼は、樹海で死んだのだ。

今までの 彼は・・・死んだのだ・・・

## 夢

いつものようにお気に入り登録して有る掲示板に繋ぐ彼女。

だが、信じられない書き込みを見るのだった・・・。

「え・・・」

450：：2006/11/12（月） 07：25：22 I  
D：?????

今から死にに行く。お前ら世話になった

彼女は、その書き込みを見て驚愕した。

「なんで・・・嘘・・・止めて・・・」

慌ててレスを返す彼女。

『お願い 死なないで。帰って来て・・・』  
と・・・。



すると、『君の為に帰って来るよ』と帰って来た。

「違うの・・・勘違いしてるよ・・・。彼はただの友達なの・・・。」

「私は、誰にも恋愛感情が持てないの・・・。」

「でも、でも・・・友達として一番好きなのは貴方なのよ・・・。」

「だから、だから・・・。帰って来て・・・。」

・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・

・・・帰って来て・・・。

「やっぱ、夢か・・・。」

「俺の事なんて、心配する分けないしな・・・。」

この後、樹海の中で、

彼の妄想が具現化した彼女の姿を見る事になる・・・。

『そこには存在しない』はずの、彼女の姿を・・・。

## 現実

樹海から帰って来た彼を待っていたのは醜い現実であった・・・。

「君ねー。なんで無断欠勤した分け・・・？」

「す、すいません・・・。」

「辞めるんなら辞めるで良いんだよ？無駄な給料払わなくて良いからね。」

君なんていてもいなくても一緒だからね。」

誰からも、必要とされない・・・

「ただいま・・・」

「ああ忙しい。退いてよね。」

母親を彼を押し退き職場に向かう。

「・・・」

父親を彼をチラッと見て、言葉を掛けずに通り過ぎる。

「待ってよママー。学校まで乗せて行ってよー」

弟も、まるで彼を透明人間かのように無視して学校へ向かう。

家族は彼が帰って来た事についても特に関心を持たないようだ。

いや、そもそも彼が樹海に向かった事も知らないのだろう・・・。

「・・・」

誰からも、愛されない・・・。

部屋に入り掲示板へ繋ぐ彼。

そして書き込みをすると歓喜のレスが返ってくる。

『帰って来たのか!!』

『待ってたんだぞこのヤロー!!』

『俺に無断で死ぬんじゃないよ・・・』

そして、愛する人からも・・・。

『・・・お帰りなさい・・・』

「みんな・・・。」

彼は涙を流した・・・。

だが、それはあくまでも『掲示板』と言う名の不透明な場所での、表向きの発言で有った・・・。

実際は正反対の事を思っているのだった・・・。

『なんで帰って来たんだよ・・・』

『うぜー。死ねよ。』

『ゴミが一人減ったぐらいどーって事ねーんだよ。』

そして、愛する人も本心では・・・。

『キモイわ……。私またストーカーされるのかしら……。

折角、邪魔者がいなくなつてルキタンと仲良くやれると思つたのに……。』

何も知らずにお礼を言う彼・・・。

「みんな、ありがとう・・・。」

誰からも必要とされない 誰からも愛されない

彼が生きてる世界は天国 それとも地獄？

何故生きるの？幸せなの？

あの時 死んだ方が良かったんじゃない？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0252d/>

---

自殺

2010年12月25日20時34分発行